

『銃と十字架』

2021年11月10日

妻はキリシタンに興味を持ち、関係する本を読んでいる。図書館から、遠藤周作氏の『銃と十字架』を借りてきて、私に勧めるので、読んでみた。ペドロ岐部の生涯を描いた本であった。岐部は、大分県の国東半島北端の岐部という漁村出身で、17世紀、イエズス会の神父となり、キリシタン禁制時代、壮絶な殉教を遂げた人である。私の育った故郷は国東半島のつけ根の杵築市で、岐部までは30数キロである。母教会に立ち寄った時、ある方が、「ペドロ岐部記念館」に案内してくれ、こんな人が同郷にいたのかと、その生涯に敬服、感嘆した。妻を連れて、再度「記念館」を訪ね、妻も感激していた。

遠藤周作氏は、17世紀のキリシタンが生きていた社会と迫害を受けて苦しんだ彼らの状況を歴史的に捉え、その狭間で生き、死んだ岐部像を描いている。ただ、岐部が書き残した文書は少なく、分からないことが多いので、周りの状況から、推測、想像して彼の信仰、精神を浮かび上がらせている。その想像は正鵠を得ているのではないか。

長崎県、島原半島の領主だった有馬氏の居城に有馬神学校（セミナリオ）が建てられ、10歳を過ぎた少年たち22名が集められ、ミサと祈り、ラテン語と西洋楽器の学びが始まった。開校後まもなく、キリシタン禁制となり、迫害の波で、場所は転々としたが、33年間、存続し、ローマに行った天正少年使節になった少年や神父になった少年たちが学んだ学舎である。織田信長や豊臣秀吉はプラグマチストで、西洋文化、文明を利益のために利用していたが、徐々に棄教を迫り、迫害が起こり始めていた。1600年に、15歳頃のペドロ岐部と弟が有馬神学校に入学して来た。神学校を卒えて、「同宿」という地位を得る。これは、神父を支え、下働きをする仕事である。日本人は軽蔑され、神父になる道は閉ざされていた。岐部はミサを立て、告解を聞き、終油の儀式のできる神父になりたいという強い願望を持っていた。その時、秀吉からキリシタン国外追放の命令が出され、マカオに向かう。迫害に苦しむ仲間を捨ててマカオに逃げることは後ろめたかったが、神父になって日本に帰り、仲間を支えると心に決めていた。マカオでは歓迎されず、インドのゴアの神学校に行くが、ここでも歓迎されず、ローマに行って、神父になると決意する。ペルシャ湾からホルムズに入り、シリア砂漠を横断し、エルサレムに向かう。岐部は、日本人として初めてエルサレムを見た人ではないか。主イエスを身近に体感したであろう。ローマに辿り着き、そこでは厚遇され、33歳の時、念願の神父に叙階された。帰国を目指し、海路で長崎に着く。徳川幕府によるキリシタンへの過酷な迫害時代が変わっていた。人望を集めていたフェレイラ神父は「穴吊り」の拷問に耐えかね棄教し、沢野中庵という日本名をつけられ、妻帯した。岐部は長崎での宣教はできないと、東北に逃れ、隠れて、苦しむ仲間たちを司牧していく。彼の信仰を、遠藤氏は、無償の生涯と報われない死によって、キリスト教は愛のためにだけあると証明する、キリスト教が植民地獲得に奔走する宗教でないことを同胞に見せたかったのだと受け取っている。迫害の描写は、読むのも耐え難いものである。岐部は、主イエスの受けた苦難に倣うと決めているが、揺らぐ心を抑えることはできない。仙台で捕らえられ、江戸に送られ、棄教したフェレイラ神父と対面し、棄教を勧められるが、拒絶する。岐部ら、三人の神父が穴吊りの拷問を受け、二人の神父は苦しみ耐えかね棄教するが、岐部は信仰を全うし、殉教していく。『沈黙』の姉妹編と言われる『銃と十字架』は、苦難に耐え抜いたペドロ岐部の壮絶な生涯を伝えている。棄教した人は宣教を虚偽とされ、仲間を密告し、悲劇を増幅させた。生ける屍のような生を送ったという。しかし、彼らの生と死が歴史の暗部を映し出していることは確かである。